

幼こ保小架け橋プログラムに関わる研修会 授業公開・講演会 令和6年10月11日

「架け橋プログラム」は、「子供に関わる大人が立場を越えて連携し、架け橋期（義務教育開始前後の5歳児から小学校1年生の2年間）にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子供に学びや生活の基盤を育むことを目指すものです。（文部科学省）」

赤磐市では「**学びをつなぐ**」ことをキーワードに架け橋プログラムを推進しており、その一環として研修会を開催し、市内外から70名以上の参加者がありました。研修会は授業公開と講演会を行い、講師に元文部科学省主任視学官 嶋野道弘 先生をお迎えし、ご指導をいただきました。

架け橋期のコンセプト

「安心して学校生活に入る」「のびのびと自己を発揮する」「自分の力でやってみようとする」

1年生 生活科

「いきもの なかよし」

森山奈生 教諭



架け橋期のコンセプトを元に単元を構成し授業を計画されていました。

「**安心して学校生活に入る**」・虫取りや虫の飼育など、幼児教育での経験をもとにして子ども達と一緒に学びをつくっていました。**幼児教育での経験から1年生の学びにスロープで繋がってる**感じです。

したがって、子ども達はそれぞれの経験や虫に対する思いに差があったとしても、無理なく安心して学習に取り組み、自分のペースで虫と関わることができました。

「**のびのびと自己を発揮する**」・虫を観察する飼育ケースを段ボールで色々アレンジしたり、動き回る虫を体全体で観察できるように教室の外に設置された蚊帳（ムシムシハウス）の中で夢中になって観察したりしました。また、虫の観察をして発見したことを発表する際には、動作を交えながら

いきいきと伝えていました。このように**環境構成の中で子ども達は虫をきっかけに、自分の「ためしたい!」をしっかりと発揮していました。**

「**自分の力でやってみようとする**」・「あそぶ」「おせわ」「ずかん」「えをかく」「しゃしん」の中から、自分がどのように虫と関わるか、自分のめあてを設定しました。子ども達はムシムシハウスで虫と遊んだり、飼育ケースの手入れをしたり、タブレットで写真を撮ったりと**自分の選択した活動の中で「あたらしいひみつ」を見つけ**、自分の表現の仕方でも友達に伝え、「お世話日記」を丁寧に書き込み、学習の振り返りを行いました。子ども達は目の前の「自分の虫」に没頭し、子どもの観点でいろいろな「あたらしいひみつ」を見つけました。その発見を子ども達から引き出し、先生が価値づけるといった子ども達がとても輝いている授業でした。

無生物も生物も「ある」ことが何よりも大切ですが、生物は「なる」力を持っています 特に 子供がそうです
子供は なるだけでなく 自分を何者かに「する」力を持っています
ぼんやりとなるのではなく『なりたい』という思いや願いを持って自分ですることによってなっていくことができます
教育は 子供をどうみるか ということと深く関係しています

嶋野先生の「**子供観**」と「**教育観**」が集約された言葉です。

子どもは思いや願いを持ったとき、自ら学び、自ら伸びようとします。そして、そのための鍵となるのは、環境構成、支援、子どもの見取りです。

今回の授業を例に嶋野先生の言葉で表現すると「**直接学んでいるのは虫、虫は子どもにとって先生。子どもの発見、学びを価値づけるのが先生（担任）**」ということです。環境構成をもとに、子どもは願いや思いを持って虫と関わり、その中で体のつくりや動き、感触など多くのことを学び取っています。その学びは経験知として子どもに蓄えられ、次の学びへとつながっていきます。

講演ではこのような子供観、教育観をもとに架け橋期に、幼児教育と小学校教育をどのようにつないでいくか「カリキュラム」「教師の支援」等、様々な視点で具体的にお話をいただきました。

「**子どもは自ら伸びようとする**」幼児、児童、生徒どの発達段階においても普遍的なことだと思えます。その子供観に立って教育活動や日々の授業を見つめ、1人1人が大切にされる赤磐市の学校園として発展することを願っています。

講師 元文部科学省主任視学官

元文教大学教授

嶋野 道弘 先生

